



農具

水田域

青谷上寺地遺跡の水田は、中心域南西側の低地を中心に、集落の継続期間を通して営まれたと考えられます。

出土したおもな農具

弥生時代の農具は、本格的な水田耕作の始まりとともに日本列島にもたらされたもので、農作業の各段階で使用される道具がセットとして列島各地に波及しましたが、地域色もあります。青谷上寺地遺跡では700点近い木製農具のほか、約150点の石庖丁など、石製の農具が出土しています。これらの中には、青谷上寺地遺跡独自の形態のものもみられます。

○土を掘る、耕す、均すための道具（鍬、鋤、掘り棒など）

農作業や土木作業において利用されたと考えられる道具。
平鍬、又鍬、横鍬、平鋤、又鋤など、用途に応じて使い分けられていました。

○収穫するための道具（石庖丁、木庖丁、石鎌、木鎌など）

おもにイネの穂首刈りを目的とする小型の石庖丁、木庖丁のほか、イネの根刈りや除草などに使う石鎌や木鎌があります。

○田下駄

足裏に装着し、水田や湿地での作業の際に、足の沈下を防止したり、水田の土をかきまぜるために使われたと推定されます。遺跡内から200点以上が出土しており、木製農具出土数の1/3が田下駄です。板状のもので、足を固定する紐の付け方により、穿孔式と挟り式があります。

○脱穀や籾摺り、藁打ちなどに使用する道具（臼、杵、横槌）

臼は、直径40～70cm程度のもので、中央部がくびれた円筒形のもので、中央部がくびれた円筒形のもので、杵はすべて縦杵で、長い棒の中央を握り部とし、端部を臼に搗きあてて使います。横槌は、藁打ち、豆打ちなど、作物を叩く用途に使用されたと考えられます。

○田舟

水田内などで、収穫物等を運ぶ際に使用したとみられます。



土を掘る、耕す、均すための道具



収穫するための道具



田下駄



藁打ちなどに使用する道具



田舟